

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	あの男 : 小説 : 文苑
Author(s)	牛原, 硯月
Citation	龍南會雜誌, 126 : 46 - 55
Issue date	1908-06-18
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6142
Right	

あ　　の　　男

牛　原　硯　月

私が郊外の北里村から某官署に通つて居た時のことであつた。

北里村といふのは市から半里とは離れて居あい村であるのにも係らず、鳶野山の山陰にあつて居るので殊更らに鄙びた、而して貧しい村である。北里小學校の建物を中央に於て百四十戸の家は大抵、茅葺で、村民の多くは農業に従事して居ると云ふよりも寧ろ他種の勞働に従事して居ると云つた方が適當で、町へ出で日々の雇錢を貰つて渡世するといふものか大半、荊棘を背負つて町に賣りに出るものもあれば、鳶野山から榊木の條を採つて賣に行くものもある。簡單に云へば此處の村民は大概一定の稼業を有しあい。故に寂しさうな貧しい村なので。

私の借つて居た家は此の村では一番幅を利く百姓の吉村といふ者の家で、瓦葺ではあつたが、八疊の座敷に、六疊と四疊、厭やに煤ばけた家で、近所には四五軒の家はあつたが、全年、朝霧の晴れぬ中に家を出で、夕星を戴いて歸つて來るといふ稼の者ばかりで、至つて閑靜な住居であつた。其頃私は一人の父親に死なれ、長男の春生はまだ生れて滿一年にはなつて居あい時であつたし、妻との相談の上、實はいくらか生活も容易く出來やうといふ田舎育ちの妻の意見に引かされて、此處へ引越して了つたのであつたが、長年の間都市に居た私共には殊に不自由を感じたのであつた。鶏も飼ひ、裏の畑には玉葱も植ゐて居たが。さう便利にも何にもならぬ。併し妻だけは結構だと云つて居た。

それは霜月のある日曜日のことであつた。朝來^{あさか}少し温^ぬかで、曇^ひ天^{てん}で、雪でも降るやうな空合かと思つて、寂^{さび}しさうに太陽が雲の間から光を漏らすといふ氣^き紛^{まぎ}れな日和であつた。私は裏に出て鶏^{けい}が餌^{えさ}を涉^{あさ}つて居るのを見て居たがそれにも倦^うんで、鬚^すを剃るため理髮所へでも行つて見やうと思つたので、直ぐ其の儘理髮所へ行つた。理髮所は私の家から一町ばかり隔つた、道端の低い穢^けい家^けで——それでも戸はかりは硝子戸であつた——私は毎朝其の道を通つて行くので、よく其の理髮師とは見知つて居た——頭ばかり叮嚀^{ていれい}に分けてから、體軀^{たいく}の大きい、二十七八の男であつた。何にしろ大阪で理髮の稽古をしたといふが彼の自慢で、得意の大坂辯^{べん}を直ぐ出して見せる。

私^{わたし}が其處の前へ行くと、何か内ではがやく云つて、大分人が集つて居るやうである。而しよく此處には人が集つて居るので、曇つた硝子戸を開けて、顔を突込んで見ると、果して髪を摘みに來てるものは一人もあゐない。色の黒い紺^{ねい}の振半纏^{おちはんてん}の男が二人、それに村では誰一人知らぬものはあゐないふれ初^{はつめ}といふ女、今日は子まで連れて來て居る。それを皆^{みな}てちや^{ちや}かして居るらしい。理髮師の駒^{うま}は私の顔を見て、

『お入りやす』

『大分^{だいぶん}、賑^{にぎ}つてゐるね』

『はあ』

一人の男は新聞を擴^{ひろ}げて讀み出した。私は逡巡^{しゆんそん}して居ると、

『瀧川はん、まあ、此方へた寄りやす』

『わ』

私が腰を下すと理髪師は

『たい、湯を沸かすやうにせんか』と其處に何か針仕事をして居た妻に云つた。

『一寸、た一人はん、髯だけだつせ』と私の顔を見て云ひながら立つた。紺半纏の今一人が削るのである。理髪師は石鹼を以て、其の男の髯を濡らしながら、私を見て

『瀧川はん、私に葉書を一枚書いて下はれ』

『わ』

理髪師は石鹼の著いて居る手で、隅を摘んで、私に葉書を渡した。

『これに何と書くんだ』

理髪師は嬌然になつて、

『さ、た初はん、どんな事を書くんか、言やはらんか』

『はい』と云つてた初は俯向いた。

改めて私はこのた初といふ女の事を述べねばならぬ。た初といふのは私の宅の直ぐ裏向へに當る家と云へば家。人の住つて居やうとは誰だつて思はない豚小屋見たやうな、九尺二間には無論足りない。否床あごはない、地べつたに丸太を併べてその上に疊を五枚ばかり敷いてあるだらうと思はれる龜吉が家の一人娘である。實にこの龜吉が家といふのがどうも不思議な家である。といふのは其の小さい豚小屋に龜吉の夫婦、子が六人——末子の武雄とかいふのを他に——皆娘であつた——

それに同居人も居れば、遠方から尋ねて来たやうな客もあるらしい。それに遊手徒食と来ては此の生活難の世の中にどれ位の資産があつた所で出来ない事、それに龜吉は毎日、日雇に出て行くやうであるが、荒れ豊と綽名された龜吉の妻——顔立ちはさう醜い方では無いが片目だ——は此の頃は何かしない。私は日曜を日に宅に居る時、好奇心以上の或るものを持つて氣を附けて見たが、娘は皆遊んで居る。それに龜吉は二日置きには中々高くつて呑めない酒を飲んで酔狂をして暴れ廻つてゐる、黒紋附の學生風の男がこの見すばらしい家に出入するのかと思つて驚いて居ると、これはまだ奇穢だ。六十ばかりの老爺さんが、身なりもさう悪くないのが来て、『私は甚だ申上げ兼ねたことだけど』とた豊に云つて居る。はてなど耳を聳て居ると『それ、何だらうか』『私今夜、一晚止めて下さつせい』『た易い事』と、こんな會話が聞へる。實際どんなにして寝込んだらう、あの豚小屋にと誰れでも驚くだらう、するとまた若い奉公人らしい女が二人も一所に來る事がある。斜子の羽織を着た八字髯の男がやつて來る事もあれば年寄の媼も來る。丁半で當世をして居るかも知れぬと思ふが駐在巡查も時々其の宅へ入つて行くのは又々の不思議である。村の者は何でも彼等を恐れれたやうにして居る。何とも噂もしい。といふのは畢竟『觸らぬ神の罪はあたらぬ』と何時でも妻が私に云ふ事である。た初は其の総領娘で、もう三十近い年ださうな、でもまだ二十三四といふ若さ、脊は高いが、どちらかと云へば纖弱な性で、色は寧ろ青い方である。近所のものに遭つても叩頭をするといふことが判らない。唯時によるとこちや、こちや、白粉を塗つて居る。奇う洒落てやがるかと思つてると、龜吉が酔拂つてから、一つ擲りでもしやうものなら、ワーワー聲を立て泣くといふ

種の女である。

五十

私は初の手紙と知つて、何だか不安な氣持になつたが、何あに關ふもんかと思つて『何と書くんだ』と問ふた。

裏を返して見ると、金釘流でもう一行書いてある。

(拜呈仕候陳者ゲン寒)

『あの、何です、これが親爺おやぢにやるんですよ』

と云つて小さい娘の頭を撫でた

『それで何と』

『もう、今年の六月頃、手紙が來まゝて、それから一度も來ませんから』

『それで手紙を寄よしてくれといふの』

『いゝわ、はい』

『それあ、もう彼地で別嬪見附けてまつせ、ハッ……早やう此地に來て下はれと書きやはれ』と理髮師が大きな聲で笑ふと、皆どつと笑つた。で私も何だか馬鹿馬鹿しくなつて來て、喜劇中の一人のやうな氣持にあつて了つた。

『ぢや、言ふ事はそれだけだね』

『はい專賣所の方が忙しくつて、遂手紙も出さう出さうと思つて居て、出せあかつたつて、書いて下くださう』

『はいく』

私は筆を採つて、もう総ての事が讀めたといふ鹽梅で『ゲン寒』の下に直ぐ、かう書いた

(凌ぎ難く候へども、思焦れるせいかうて、風邪も引き不申健全に候、實はたび／＼御手紙さしあげ、御伺ひ申上たく存じ居候ひ／＼も、專賣所の方多忙のため、心に任かせず、それに檀那樣よりは一度も御手紙も來ず、御國元にははすことは申しながら、浮きたる女にももの／＼しき事やはすらんなど人の噂も有之候まゝ、御返事をくれ／＼も)

而／＼て、猶一行分残つたので

『もう、云ふことはないの』と尋ねると

『はい、あの今月の五日から豆腐屋の裏へ來てるとそれだけ書けまかしら』

『ふむ』

私はそれだけ書き加へた。

『ぢや、名宛』

『こゝでございます』と男から來た手紙を差し出す、

『ねえ、大分縣速水郡杵築町六百四十五番地、磯田清次郎だらう』

『はい』

『此方は、花園村字北里、それから何だ』

『齋藤やす方で』

『名は』

『松山はつ』

『はあ、斯う書いた』と私は讀まうとしたが、何だか馬鹿馬鹿しくつて、讀めないので、

『時候の挨拶を書いてから、手紙を出さうと思つて居たけど專賣所が忙かしくつて出せなかつたつて、それから返事を出して下さいつて、それから、豆腐屋の裏へ引越した事、それだけだつたらう』

『はい、ありがたう存じあげます』と初は頭を二三度續けて下げた。

其の間に一人の髯は剃られて了つて、理髮師はまた私の方へ來て火に温つた。大きな嚏を三ッ四ッ續けて

『や、俺ら風邪引いて、あ、ハックショ』

『風邪の藥、私が上げようか、風邪の藥は誰れも飲まんからまだ澤山あるから』と初が云つた。

『少し下だはれ、醫者に見せると一日十錢とられるから』

『ほんとにね、磯田さんか宅に居なさる時は藥こそ手のもんだつたけど、此の間子供が熱のあつたから一寸診察て貰つて、十日ばかり藥をとつたから、二圓ばかり拂つたよ』

『あんまり、近來は高いね』

『ほんとにね』

『さ瀧川はん』

『やあ』

私は髻を剃つて了ふ間、此の磯田といふ男に就て考へた。磯田といふのは彼の始終豚小屋を訪問して居た醫學生とかいふのである。脊の低い、髻を蓄^はやした、色の淺黒い、額の狭つくるしい、あんな所に入^いりするからと思はくつても卑やしいやうな男であつた。私は其の醫學生がた初と夫婦にあつて居て、子まで産んで居たことは以前から知つて居た。而し彼は杵築町のもので磯田といふことは始めて知つたんだ。

私の阿母さんは私が三歳のまだ乳離^{ちばな}れぬ幼子であつた時、或家系上、否社會上の物々しい億劫な議論から生^き家へ歸されて、私は父親の手一つに育て上げられたが、私の阿母さんは其後間もなく、大分縣杵築町の磯田といふ醫師に再嫁したといふ事の近隣に噂があるのを子供ながら耳に止めて居た。其の時分は近隣には手紙のやとり位はやつて居たものもあつたらしい。否^{いや}私がもう中學に入つてからたつた。吉岡の阿母さんが私に其の手紙を見せて、非常に優しい、美^いくしい、親切な方^{かた}だつたとそして吉岡と私は遂後先に生れたので、吉岡の阿母さんが私に乳を吞ませやうとすると、私が逃げて廻つて居たと、そんな昔話をされて、恥かしく、又母が戀ひしいといふやうな、いやそれ以上^いに自分を親切に世話してくれる吉岡の阿母さんのやうな女の方が欲しいと、そんな事を思つたこともあつたつけ。

私はそれは明かに記憶して居るが、確かに磯田と云つて居た。

私が斯^あんな事を思つてる間に、髻はもう全然剃^すつて了はれた。私は巾著から銀貨を一枚出して、

それを擲りつけるやうに與つて、釣銭があるといふのを耳の邊までも寄せつけずに出て了つた。而して私は道すがら何とも云へない不安の情に捕へられた。あの男が私の種違ひの弟であらうか。私は宅へ歸つて妻に話して見やうと思つたが、またそんな事を話したら『あんを奴に手紙を書いてやるかんで、莫迦な』と屹度、妻が怒るだらうと思つた。私が宅へ歸ると。妻は

『貴方何處へ行つてらしつたの』

『髻刺りにさ』

『あんまり暇が入るぢやありませんが、今日ばかりは街に出るさや、坊が着物は一つもないぢやありませんか、寒くなつたのに』

『此の間買つたのはまだ縫はぬぢやないか』

『一枚か二枚ぢや足りませんよ』

『さうか、今から買つて来るが好い、留守番は我輩が受合つた』

『ほんとに仕様があいわ、日曜日でも、日がかう短かくつちや、もう、行けやしあいわ、十一時ですもの、晝からにしあさや』

『それぢや、晝からでもよろしい』

『貴方だけ吞氣だつたら好いわ』

『さうかね』

『さうですとも』

『まあ、御座り、面白い話を聞いて来たから』

『面白い話あんか入りませんわ』

此の風では話せない。話すからば面喰ふに決つてゐる。何時か機會を見て話さねはあらぬと、私は黙つて了つたが、其の明くる日になると、自分がしたことが益馬鹿馬鹿しくあつて来て、猶猶話せなくなつた。――

其後もう三年になる。私はこれほど打解けて居る夫婦の間に――二人の兒の父と母とにあつた今も猶――『あの男』といふ秘密を持つて居る。

小 い な 花

蕭

梧

自分は、參らうとくた清司の墓の前に、小さい愛らしい影が、熱心に伏し拜んで居るのに驚いて思はず足を止めた。

清司とは、一週間前に亡くあつた、自分の受持の級の儚い小天才の名である。

自分は此の小さい影を驚かすまいと五分十分―十五分―ヤツ、待つて居たか、小さい影は身動きもせぬ。見た様を後姿とは思ふが、薄暗い夕暮の光に大きな木が繁つて居るので、分明と解らぬ。

意屈紛に、傍の木に手をかけると、けたましい、聲を立て、名も知らぬ鳥が雑木の中から飛び出